

敦煌寫本を求めて — 日本人學者のヨーロッパ訪書行

高田時雄

百年になるうとする世界の敦煌學研究史の中にあつて日本人學者が果たした貢獻は決して小さくはない。佛教學、法制史、社會經濟史など、日本の學者によつて開拓されてきた分野は廣範圍にわたり、それぞれの分野で數々の誇るべき業績を有している。しかしこれらの業績の多くが實は英佛をはじめとする外國所在の敦煌遺書を材料として行われた研究であり、そのための資料探訪が日本の敦煌學史における重要な側面を爲していることを忘れてはならない。

もちろん日本國內に敦煌寫本が全く存在しなかつたわけではない。いわゆる大谷探險隊が敦煌を含め西域各地で蒐集した寫本群が存在し、それが日本敦煌學の萌芽期に一定の役割を果たしたという経緯はあるが、所有者である大谷光瑞の西本願寺教團内における地位の轉變とともに、將來寫本も複雑な運命を辿ることになり、その後長く學者の利用するところとならなかつた¹。いきおい日本の敦煌學者は英佛などヨーロッパ諸國の圖書館について資料の収集を行わざるを得なかつたのである。しかしまた英佛所藏の敦煌寫本が質及び量の面からしても、抜きん出た價值を有するものであつたことも、學者たちをして海を越えさせた最大の理由であつたことは言うまでもない。彼らは多くの困難を乗り越えて、貴重な寫本を或いは手寫し、或いは寫眞に撮影し持ち歸つた。目録の作成に協力し、世界の學者の研究に便宜をもたらしたことも稀ではなかつた。

小文では敦煌學の形成期における日本人のヨーロッパ訪書活動について簡単な素描を行つておきたいと思ふ²。ただ與えられた紙幅の関係から、網羅的に紹介することが不可能なのはやむを得ない。ほとんどすべての寫眞が日本國內の複数の圖書館に備えられ、また各種の圖録や録文集が陸續出版され、さらには鮮明なカラー畫像を居ながらにしてインターネット上で見ることさえ出来る今日では、ここに扱ふ訪書行などは先ず想像もつかない時代の事柄に屬するが、しかしこれらはそれぞれに日本敦煌學史の重要な一齣なのである。

最初期のヨーロッパ調査行を語るに際しては、やはりその背景を少し述べておく必要がある。ペリオは、スタインに遅れること一年、1908年に敦煌で大量の寫本を獲得したが、まずその本據地であるハノイに歸り、翌1909年、購書のため再度北京にやつて來た。そのとき所獲の敦煌寫本の幾つかを携えて來ており、羅振玉等の中國學者にそれらを見せた。彼らはその内容に驚倒するとともに、また危機感をもって敦煌に残された經卷保全に取りかかつた。一方ペリオの寫眞が羅振玉から京都の學者たちのもとにもたらされると、狩野直喜や内藤湖南らは、折しも大谷隊の將來品が京都に到着したことも相俟つて、展覽會を開き講演會を催して、敦煌學を鼓吹したのである。さらに羅振玉等の運動が功を奏し、1910年敦煌からすべての經卷が北京に運ばれてくると、京都大學では狩野、内藤のほか、小川琢治、濱田耕作、富岡謙藏を派遣してその調査に當たらせた³。しかし期待された敦煌寫本の調査そのものはやや期待はずれに終わり、ペリオの見せた寫本と北京のそれと

¹比較早い時期にその尤品の寫眞が『西域考古圖譜』として公刊された。大正4年5月刊。ここには文物寫本計690餘種を収める。この調査研究に當つたのは、草創期敦煌學の擔い手であつた京都大學の諸教授であつた。なお複雑きわまる大谷探險隊將來品轉變の歴史については、藤枝晃「大谷コレクションの現状」『龍谷』第16號、1978年4月、6-9頁が簡潔な展望を與える。

²1910・20年代に日中學者がヨーロッパで行つた敦煌文獻調査について簡明な表が以下に見えている。辻正博「草創期の敦煌學と日本の唐代法制史研究」『草創期の敦煌學』(2002年、知泉書館)152頁、表1。

³詳しくは拙文「明治四十三年京都文科大學清國派遣員北京訪書始末」『敦煌吐魯番研究』第7卷(印刷中)を参照。

を比較して、英佛に持ち去られた寫本への思いが一層大きくなったとしても不思議ではなかった。

さてヨーロッパにあって最初に敦煌寫本を見た日本人は、歴史學者黑板勝美（1874～1946）である。當時東京大學助教授であった黑板は、學術研究のために歐州旅行に赴き、明治41年（1908年）2月26日横濱を出航、同43年の2月に歸國している。黑板はそのヨーロッパ滞在中に、ベルリンでドイツ隊の發掘物を見、またロンドンでは到着したばかりのスタイン第二回探險所獲品を見學した。その目睹し得た數量は決して多くはなかった様子であるが、すでに咸通九年刊本の金剛經に觸れているのが注目される。その言うところを引くと、

（スタインの）此の二度目の時は中央亞細亞から路を長城の方面に取り縦横自在に發掘し、又土人より購ったものも頗る多く最近に佛蘭西のペリオ氏が敦煌の發掘に着手せし以前既に敦煌の古物を買って來たのである。古物は總べて昨四十二年五月印度から英國に送り届けられたけれども尚未だ整理を了へず遺憾にも博物館の地下室内に堆積せられて、スタイン氏自身もその穴倉の中で整頓に従事して居られると云う有様である⁴。

スタイン寫本の大英博物館到着はジャイルズによれば1909年の1月となっていて⁵、黑板の言う5月とは少しズレはするが、この時期すでにスタイン寫本を見ているという事實は注意されねばならない。スタイン寫本到着後間もない時期の状況もよく分かる。黑板はもともと内藤湖南と親しく、しばしば連絡を取り合う仲で、いわば同一圏内の人物であったから、敦煌寫本に深い興味を持っていたとしても不思議ではない。

黑板はのち昭和2年5月から3年6月にかけての外國出張に際しても、パリ、ロンドンで敦煌寫本の調査を行っている。この黑板の第二回調査については、その生誕百年記念冊に同時期の日記が公刊されていて、大凡の日程などを知ることが出来る⁶。令嗣黑板昌夫氏の「はしがき」に「大英博物館のスタイン將來西域古文獻の調査は外遊の目的の一であったらしいが、別に丁寧なノートもあり、古文書學の立場から、所謂異體文字の資料に関心をもっていたことがうかがえる」とある。調査ノートの寫眞もその極一部が掲載されている⁷。黑板は日本古文書學の開拓者の一人であるが、その敦煌寫本研究についてはこれといった成果を聞かない。昭和3年10月20日史學會例會における講演「敦煌及び吐魯番出土の古文書研究資料に就いて」はその第二回調査の報告であった筈だが⁸、これも遂に公刊されなかった。結果、黑板の調査は日本の敦煌學にさしたる影響を與えることもなかった。

日本人による初期調査行の中にあつて、研究史上おそらく最も注意されねばならないものは狩野直喜（1868～1947）によるそれである。明確な敦煌寫本調査の意圖をもって行われたものとしては最初のものであり⁹、その持ち歸った録文が他の學者の利用に供されるなど、波及効果が大きかったからである。實質的には最初の調査者と言っても過言ではない。狩野がヨーロッパ各國を巡歴したのは明治45年から大正2年にかけてだが、滞在中日本に書き送った通信が當時の京都文科大學の雑誌『藝文』に載せられている。パリでのペリオ將來寫本調査に觸れた後、スタイン本について狩野は次のように言う。

⁴ 黑板勝美「歐州に於ける支那考古學の研究」『漢學』第1編第1號、明治43年5月、67頁。

⁵ Introduction to the *Descriptive Catalogue of the Chinese manuscripts from Tunhuang in the British Museum*, 1957, p.ix.

⁶ 「昭和二、三年日記」『黑板勝美先生遺文』吉川弘文館、昭和49年、217～289頁。

⁷ 上掲書、255頁。

⁸ 『史學雜誌』第39編12號彙報欄、また上掲日記の同日の項。

⁹ 濱田耕作（1881～1938）は狩野の調査と同時期にロンドンに滞在していたので、大英博物館には狩野に同行し、また狩野歸國後も折に觸れて同處で調査を行った。歸國後の報告に「大英博物館スタイン氏發掘品過眼録」（上）（下）『東洋學報』第8卷第1號、117～125頁、第8卷第3號、427～434頁、1918年、がある。ただし濱田の關心が寫本よりむしろ遺物にあったことは、その専門からいってやむを得ない。

シャバンヌ及びペリオ氏の話によれば、Stein 氏の発見物は分量に於て猶これよりも多く、其内には貴重なものも少なからず、繪畫も澤山有之候由、且漢字のものもなきなど、話有之候へども、之は訛傳に有之候。然るに之が又困難にて Stein 氏は目下印度にあり、而して其古書はブリチシイ、ミュージアムの地下ニ貯藏し、目録さへも無之、見ることは出来まいとのことを聞き候間、先づシャバンヌ氏に依頼し、同氏より印度へ手紙を出し候處、Stein 氏の返信ありかくかくせよと懇切に申來り候。Stein 氏は小生が覽る事を喜び候様子なれども、圖書館ナドいふものは支那でも西洋でも同じことに有之、面倒な事を嫌ふものに候間、果して成功致し候哉疑問に候へども、Stein 氏の先容ありまたセイス氏の紹介状も有之、ムゲニハ^{ネツケ}子付はされぬ事と存じ候¹⁰。

スタイン自身は漢文を解しなかった。しかしスタインはこれまでも自身で解決できない言語文字材料については適任の學者に整理と研究を委ねるといふ合理的な方式を採用しており、これら大量の漢文寫本については最適の人材としてペリオを選び、その整理を委ねることにしたのである。その交渉は早くもスタイン寫本が大英博物館に到着した翌年 1910 年に行われている。ペリオはスタイン寫本の目録作成を請け負うに當たって、幾つかの條件を提示した覺書を残している¹¹。それによると、ペリオの條件は以下のようなものであった。

- (1) 寫本は何度かに分けてパリのペリオのもとに運ばれること。一日に數時間しか開館しない公共圖書館において整理を行うことは大きな時間の浪費であり、仕事の非常な妨げになる。
- (2) 目録は公刊されること。
- (3) 公務員として、この仕事のために無給の休暇を申請せねばならないのだから、手當なしでは濟まない。したがって目録引き渡しの際に 5000 フランを要求する。
- (4) 幾つかの文獻については、當然ながらその發表の優先權を有する。

この交渉はとりあえず成立したらしく、最初の 2 箱が翌年の 1 月ペリオのもとに届けられた¹²。しかしその後ペリオの目録が公刊されなかったことを見ると、この計畫はやがて自然消滅したものである。不思議なのは狩野が英佛で調査を行った時、この事に一切觸れていないことである。ペリオ自身もこの件については、進行中の仕事でもあり、口を緘して語らなかつたのかも知れない¹³。ペリオのもとに送られたスタイン寫本が果たして當時まだペリオのところにあつたのか、或いは既に大英圖書館に返却されていたのか、またそれらはどういったものであつたかなどは頗る興味のある點であるが、それを探る糸口がない。いずれにせよスタイン寫本はまだほとんど未整理の状態にあつたことは間違いなく、狩野の調査も全面的なものではあり得なかつた。いずれにせよ英佛の調査を終えて歸國したのち、狩野は自らの手控え¹⁴に基づいて自身の研究を發表する一方、録文を當時京都にあつた王國維にも提供し、その研究を助けたのである¹⁵。

狩野はまたヨーロッパへの途上、ロシアに立ち寄りコズロフが黒水城で発見した將來品を見た。これも日本の學者として最初である。

¹⁰ 『海外通信』二、『支那學文叢』336 頁、1973 年、みすず書房。もと『藝文』第 4 年第 4 號、大正 2 年 4 月。ルビは高田。

¹¹ Copy of memorandum of M. Pelliot regarding Inventory of Chinese MSS. from Tun-hunag. ハンガリー科學院圖書館所藏スタイン文書中のスタイン・ペリオ往復書簡中に見えるタイプ打ち文書。本文はフランス語で、この英語標題はスタインによって付け加えられたものと思われる。

¹² 1911 年 1 月 13 日付ペリオのスタイン宛書簡。ハンガリー科學院圖書館所藏。

¹³ 後にこれは秘密でもなくなつたと見え、石濱純太郎は大正 14 年ヨーロッパ調査から歸國後の講演で「全體出土の漢文目録はペリオ先生が引受けたのですが、忙しいので出来上がりません。それで博物館の漢文掛りチャイルス博士が作る事になりましたが、未だ一般に示す程度に出来上らない様です」と言っている。『東洋學の話』大阪、創元社、1943 年、53～54 頁。もとは大正 14 年(1925)8 月の大阪懷徳堂における夏期講演。

¹⁴ 狩野の敦煌寫本調査ノートは保存されていて、その書影は『支那學文叢』みすず書房 1973 年新版の巻首に見える。

¹⁵ 榮新江「狩野直喜と王國維」『草創期の敦煌學』52 頁、また柴劍虹「王國維の初期敦煌寫本研究」、その第 1 章「狩野直喜の資料提供」『草創期の敦煌學』59 頁以下を参照。

余が露都に赴きしは、一には其の大學に於ける支那學研究をも見、一つは「コヅロフ」大佐の將來品をも寓目せばやと思ひしなり。「コヅロフ」の將來品の事は、其前（明治四十一年）我國に來遊せし「イワノフ」教授より聽き、面白きもの少なからざれば、是非來れという事であったから、歐州への使路に立寄りたり¹⁶。

しかしこの時点ではオルデンブルグ蒐集品はまだペテルブルグに到着していなかったため、それらを見ることはなかった。

佛典を中心としてスタイン寫本の相當詳しい調査を行ったのは矢吹慶輝（1879～1939）である。矢吹はロンドンで大正5年6月～11月、大正11年12月～12年7月の二回にわたり調査を行っている。その第一回の際は、スタインの協力もありスムーズな調査を行うことが出来た。

第一回の自分の調査の時には大英博物館の地下室の一部——獨逸のゼッペリン襲來の騒ぎで、彼の有名なローセッタ・ストーンも地下室に仕舞われた時であった——スタイン氏蒐集室で、スタイン氏と助手のロリマー嬢とが忙しく原稿整理やその他の事務を執っている側で、最初は一包づゝ借覽したが、後には書庫や書架の鍵を借受けて自由に好きな寫本を取出して閱覽し得るの特典を與へられた。…斯くして同氏蒐集の古寫本數千點の調査に従事し、主として未傳佛典や古逸の搜索に努め、傍ら古寫經や古文書を涉獵した。そして珍しいと思つたものは、必要な一部をオートグラフに撮影させつゝ、六月から十一月初旬まで愉快に調査や鑑定を續けた¹⁷。

摩尼教經典『下部讚』を發見して、スタインを喜ばせたのもこの第一回調査の時であった。ちなみにオートグラフとは當時流行した寫眞の手法で、ネガを用いず特殊な感光紙に直接焼き付けるといふものであった。したがって焼き増しを澤山作るといふわけにはいかず、それ自身が展示の對象にもなったわけである¹⁸。

大正8年、矢吹は財團法人啓明會の補助によって、その第一回スタイン寫本調査時に果たせなかつた珍籍佚書全部の寫眞撮影を計畫した。しかし翌年、その依頼に應じて送って寄越したものは、3000餘葉の要求に對し50餘に過ぎなかつた。矢吹はその理由について以下のように述べている。

同館東洋部で簡単に當方の申請を受諾することの出来なくなつたのには大いに理由のあることで、第一これ等の蒐集品は大英博物館所藏となり、寫本管理がスタイン氏の手を離れたこと。スタイン氏はカシュミルに去つたこと。スタイン氏の管理時代の寫本番號は全部改められたこと。管理者はDr.L.Gilesに代つたこと。公開を禁じてジャイルス氏が極力整理中であつたこと。従つて當初四卷の寫本記に自分が書き留めて來た番號は全部搜出の役に立たなくなつて、縱令内容はわかつてそれを探し出すことが容易でなくなつたこと。ジャイルス氏の整理中猥りに寫眞を撮らせることを中止したこと。加之、寫本の大部分は斷片で元來無題のものや破爛のために失題のものが多く、修補せずには破損し易い状態のものが少なくなつたこと¹⁹。

ライオネル・ジャイルズがスタイン寫本の責任を負うことになつたのは、第一次大戰後の1919年からで²⁰、これは時期的にも矢吹の言うところとよく符合する。交渉の進展しないことに業を煮や

¹⁶「敦煌の遺書に就て」『支那學文叢』441頁。もと大正14年6月支那學會第12回大會講演原稿。

¹⁷『鳴沙餘韻解説』に後記として付けられた「スタイン氏蒐集燉煌出土支那古寫本の調査」、岩波書店、昭和8年、その14頁。

¹⁸矢吹の將來したオートグラフ展示會は、大正14年4月19日に「大英博物館藏燉煌出土古寫佛典展覽會」として東洋文庫で開催された。同上23頁。

¹⁹同上19頁。

²⁰Introduction to the *Catalogue*, 1957, p.ix.

した矢吹は、大正 11 年の 10 月に再度の渡英をすることとなる。規則を楯に寫眞撮影に應じない博物館當局に對し、「若し出来なければ切腹する」とまで言って出てきた以上、矢吹も必死であった。自分の佛教の専門的知識をもってすれば大いに整理に貢献できることを説き、無償の知識提供を申し入れた。さらに將來目録が完成したときに自分は餘計な批評をするかも知れぬが、いま自分が協力すればそんな煩いをあらかじめ避けることが出来るという、ほとんど脅迫まがいのことさえたのである。これには流石のジャイルズも折れ、知識の提供を受け入れたという。その結果 6 千數十枚のルートグラフを撮影將來することが出来た。これらの一部は『鳴沙餘韻』及び同解説の巨冊²¹となって學界に送り出され、また矢吹自身の研究も『三階教之研究』²²として結實する²³。

矢吹はまた第一回の調査の歸途、ロシアに立ち寄り、日本人として初めてオルデンプルグ將來の寫本を見た²⁴。

一九一六年冬にはそれ等がコンサルヴァトアルの階上に保管されていて、未だ公開縦覽を許されなかった。自分は偶々オルデンプルグ氏の厚意によりて特別に閱覽を許されたが、それは唯だ素通りして觀た丈けでも、約二時間を要した程豊富なものであった。同氏の蒐集品中、亞細亞博物館に陳列の分は公開されてゐて、その中、支那古寫本三百點程は全部閱了した。その中の主要跋文だけは『宗教界』に載せた²⁵。

時間を追って記せば、矢吹の次に來るのは羽田亨（1882～1955）である。羽田は大正 8 年 7 月 26 日より 2 年間、米・英・佛・デンマークに出張を命ぜられ、その間精力的に敦煌寫本の調査を行っている。ペリオとはかねて通信によって相識っていたこともあり、頻繁な往來によって、確固たる友情を築くことができた。ペリオが便宜を圖ってくれたおかげで、國立圖書館の調査もはかどり、ペリオの手元に置かれてあった寫本も自宅に持ち歸ることを許されたという。羽田はそれらを自分で撮影し日本にもたらした²⁶。後にペリオとの連名で出版された『敦煌遺書』は、その麗しい協同の成果となった²⁷。有名な慧超「往五天竺國傳」も羽田自身の手で撮影されたものの一つである²⁸。また羽田はペリオの目録を手寫して歸り、複製を作って同學に配ったが、それは羅福菴によって漢譯され、中國學者にもひろく活用された²⁹。

²¹ 1930 年、解説は 1933 年、共に岩波書店刊。

²² 1927 年、岩波書店刊。

²³ 矢吹の敦煌寫本調査記録や苦心の將來に係るルートグラフなどは、令嗣矢吹輝夫氏により擧げて佛教大學に淨土宗文獻センターに寄贈されている。梶原隆淨・別府一道編『矢吹慶輝博士舊藏遺品目録』、佛教大學淨土宗文獻センター、1996 年 3 月。

²⁴ 羽田亨は大正 3 年のロシア出張の折りに、狩野とおなじくコズロフ蒐集は見ているが、そのときもまだオルデンプルグの敦煌寫本は將來されていなかった。矢吹の場合は好時期に巡り合わせたというべきかも知れない。やがてロシアでは革命が勃發し、敦煌寫本はその後の複雑な國際關係の影響もあって、長い間ほとんど國外に知られることがなかったからである。わずかに 1960 年にモスクワで國際東洋學者會議が開催された折り、その一部が展示され、日本からの参加者によって手寫されたことがある程度で、全貌が判明するのはメンシコフ等による二冊の目録が公刊されてからのことになる。Opisanie kitajskix rukopisej dun'xuanskogo fonda Instituta Narodov Azii, 1, 1963; 2, 1967, Moskva.

²⁵ 矢吹上掲書、11 頁。ここに言及される『宗教界』の一文は「露都ペトログラードに於ける古經跋及疏講類」、第 23 卷第 5 號（1917）である。

²⁶ 羽田の撮影した寫眞の複製は東洋文庫にも備えられた。石濱純太郎「敦煌石室の遺書」71 頁。

²⁷ 『敦煌遺書』影印本及び活字本第一集、ともに大正 15 年 12 月の刊行、上海、東亞硏究會。これら二種は書名を同じくするが、内容はまったく異なる。前者には慧超傳のほか、釋迦牟尼如來像法滅盡之記、七曜曆日、漢蕃對音千字文の計 4 種類の寫眞を収め、後者には沙州地志殘卷以下 9 種の活字による録文を収める。フランス語のタイトルページには、前者を Série in-folio I-IV とし、後者を Série in-octavo I-IX としてある。羽田による影印本の「緒言」には「本書類ヲ二種二分チ、一ハ玻璃版ニ依リテ原本ヲ傳ヘ、二ハ活字版ニ依リテ其ノ文字ヲ収録セリ」とあるのみだが、ペリオの Introduction によれば、その區別は以下の如く明瞭である。「ファクシミリとして複製すべきテキストもあれば、印刷して出版すればそれで充分なものもある。そこでこのコレクションを二つのシリーズに分けることにした、すなわちファクシミリのほうを Série in-folio とし、印刷したものを Série in-octavo としたのである。」羽田はその後も自身の蒐集した敦煌寫本によって續編を出版するつもりがあったようだが、それは實現しなかった。

²⁸ 羽田「我が國の東方學とペリオ教授」『羽田博士史學論文集』言語・宗教篇、639～640 頁。もと『東洋史研究』第 10 卷第 3 號（1947 年 10 月）。

²⁹ 「巴黎圖書館敦煌書目」(一)(二)『國學季刊』第 1 卷第 4 期（1923）、同第 3 卷第 4 期（1932）。

しかし羽田もロンドンではさすがにかなり苦勞したようで、後になって以下のように回顧している。ジャイルズ時代になって、スタイン寫本の閲覽は相當困難になったことが、ここからも分かる。

誰でも同じことだが、自分の整理中とか調査中とかで、まだ十分に手の届いていない資料などは、餘り他人に見せたくないのが人情である。だから此等の兩氏（ジャイルズと東洋部長のバーネット—高田補）にしても、固より來訪の閲覽希望者を喜ぶ道理はなく、大概是普通の佛典類か、特に希望する種類中の格別重要でもないもの幾種かを見せて引取らせ、一寸變つたものを出してくれと頼むと、好ましからぬ顔をするか、辭柄を設けて拒絶するかが常である。此間に在って目指す重要な資料を閲覽し、更にその寫しを取るに至っては相當の外交術と根氣と熱心とを要する³⁰。

大正13年から14年にかけて、湖南内藤虎次郎（1866～1934）が滿を持して遂にヨーロッパに行くことになる。明治末年以来、日本において最も積極的に敦煌學を鼓吹してきた學者として、この旅行は長年の宿願を今こそ果たすべき大旅行であった。「歐州に滞在したのは實際四ヶ月と十日餘で、その間にかねて計畫した研究資料をも蒐集し、併せて一通りの見物旅行をもしたので、極めて多忙であった。その研究資料の中、最初から目的としてゐたのは、英佛兩國に保存せられてゐる支那敦煌發掘の古書であった」³¹という通り、その目的は言うまでもなく敦煌寫本である。同僚の狩野、羽田等からある程度の状況を聞き知っていたとはいえ、やはり自分でも目の当たりにしたいという欲求は切なるものがあつたと想像される。

長男乾吉、弟子石濱純太郎、女婿鴛淵一を帶同しての、その傳說的旅行の一端は「歐州にて見たる東洋學資料」の一文³²及び「航歐日記」³³とから推知できる。それらによれば、湖南は先ずロンドンに行き、その後パリへまわつた。大英博物館では「佛書は既に矢吹博士が調査せる筈だから、予は佛書以外のものを閲覽したいと申込んだ」ところ、「二週間ばかりで凡そ百三四十巻を閲覽し了つた時に、ジャイルズ博士から、之で佛書以外のものは略ぼ盡してゐるとのことは言はれた³⁴。」また「その中から予は三十餘種の古書を選び、それを寫眞にしたいとのことを申出たが、館の都合で許可せられたものは其の半數にも満たなかつた」という。一方、パリでは「ペリオ氏の好意によつてピブリオテーク・ナショナルの敦煌古書を閲すること殆んど六週間に及んだ。その間に閲覽したのは三百二十餘部、その他現に猶ほ整理中に屬する敦煌古書でペリオ氏の私宅に在るもので閲覽を許されたものが三百三四十部、佛蘭西では合計六百七十部を見た。」さらに「ペリオ氏は閲覽に就て種々なる忠言を與へられ、寫眞師を傭ふ事にまで世話をしてくれて自分は非常に便宜を得た。ピブリオテーク・ナショナルとペリオ氏私宅に存在する古書の中、凡そ百部ほどの寫眞を撮つたが、英國と異なり、此處では寫眞を申出たものは殆ど皆許可せられたのである³⁵。」

湖南の場合も、ロンドンでは規則を楯に嚴格な態度を持するジャイルズには些か手こずつたことが想見できる³⁶。湖南一行を助けたものは、ロンドンではアーサー・ウェーリー、パリではエリ

³⁰「中亞史研究資料の探訪」『羽田博士史學論文集』下巻563頁。もと『學鐙』第40年9號、昭和11年9月6日。

³¹「歐州にて見たる東洋學資料」『目録書譯』昭和23年、弘文堂。いま『全集』第12卷所収本による。その222頁。もと大正15年5月の雑誌『新生』に掲載。

³²注31。

³³稿本。『全集』第6卷（昭和47年11月）に初めて収録。その474～506頁。

³⁴「航歐日記」9月15日の條に「午後博物館に至る。ジャイルズ氏の言なりとて、示すべきものに已に盡きたりと傳へらる。プリセット氏來り、ジャイルズ氏に更に談ずべしと云へるも、バーネット氏の來り談ずる所によれば、竟に如何と申すべからざるが如し」とある。

³⁵この箇所の引用はすべて「歐州にて見たる東洋學資料」による。

³⁶「航歐日記」9月1日「...明日ジャイルズ氏を再び訪ひ研究に従事せしめらるべきことを約せり。」同2日「又大英博物館にジャイルズ氏を訪ひ、持參せる諸書を贈り、スタイン、コレクションを觀覽せんことを求めしに、現に讀書室休暇中なれば、五日以後ならでは觀覽出來ずと答へられ、聊か昨日の様子とかはりたれば、...ウエーレー氏に面し、...スタイン、コレクションの觀覽の出來ざる事情を述べたるに、ウエ氏は余等を導きて東洋部長バーネット氏に面せしめ、且つ余等の爲めに言ふ所ありしも、結局スタイン、コレクションの觀覽はジャイルズ氏に一任しありとのことにて已むを得ず五日まで待つことゝなれり。」

セーエフであった。ともに日本通として名をはせた學者である。

湖南はこの調査旅行に当たって、羽田が手寫して歸ったペリオ目録はもちろん、前年同じく英佛を調査した董康の閲覧目録³⁷も持参し、出来る限り組織的な調査を目指した。そして自身の調査結果を、これまで羅振玉によって公刊されたもの、狩野・羽田・董等がすでに調べたものを総合するかたちで敦煌遺書目録の作成を企圖したが、結局これは實現せずに終わった。

以上は大正末年までの日本人による調査の概略であるが、年號が昭和に改まってからも、日本人學者の敦煌遺書探訪は精力的に繼續された。すでに豫定の紙幅も盡きているので、詳細に觸れることは出来ない。それら學者の名だけを列挙すれば、昭和初年の小島祐馬³⁸、昭和二、三年の大谷勝眞³⁹、昭和六～八年の那波利貞、昭和八～十年の重松俊章、昭和十、十一年の神田喜一郎等がいる。なかでも那波はペリオ・コレクションの全體に眼を通し、未公開部分の目録を作成するとともに、何十冊にも及ぶ録文を持ち歸り、それを基に長大な論文を多数送り出した⁴⁰。また神田は、先年の羽田と同じく、ペリオ本の寫眞撮影を自ら行い、それを圖録として出版したことが特筆される⁴¹。

彼らはすべて當時の帝國大學教官であり、また京都大學出身者が大きな比率を占めていることが注意される。戦前の帝國大學教官には官費による留學や出張の機会が多く、ヨーロッパに赴いて敦煌寫本調査を行うことにも甚だしい困難はなかった。決して資料大國とは言えない日本において、敦煌學の先進的研究が可能であった背景にはこうした事柄もまた抜きがたく存在する。さらに京都大學出身者が多数を占めるのは、やはり狩野・内藤によって主唱された草創期以來の敦煌學が京都において強固な傳統となっていたことの證左である。

彼らの調査がロンドンよりもパリに集中する傾向があったのは、日佛の學者間に以前から緊密な學的交流が保持されていたためであるのも勿論だが、大英博物館のスタイン文獻閲覧が厳しく制限されていたということも大きな理由であるに違いない。ロンドンでは調査者がしばしば苦勞したということは上にも繰り返し見た。ロンドンでは、ペリオに委託した目録作成が結局うまくいかず整理に一頓挫を來したと、さらにその後目録の責任を負ったジャイルズの仕事の進捗が餘りにも緩慢であり、また必ずしも積極的に國際的な協力を求めなかったことなどが全面公開を阻んだ主たる原因になっている。戦前の敦煌學において、ペリオ本に材料を求めることが多くなったことも致し方のないことであった。資料の公開はそれぞれの所藏機關の主體的な責任に委ねられるべきは當然としても、それが研究の進展に大きな影響を及ぼすこともまた不可避であり、歴史的に見ればスタイン本の整理の遅れは敦煌學の發展にややブレーキをかけた面があることを否定できない。

ただこうした状況は戦後の1955年、東大の山本達郎・榎一雄兩教授の斡旋によってスタイン蒐集のマイクロフィルムが東洋文庫にもたらされたことによって一變する。この時期にはすでにジャイルズの目録原稿も完成しており、そのために寫本全體の寫眞公開が解禁になったものである⁴²。この時点で、寫眞の見やすさだけについて言えば、スタイン本とペリオ本の地位が逆轉することになった。ペリオ本の寫眞は學者個人の必要に応じてさまざまな機会にもたらされたものがあるだけで、全體としてマイクロフィルムが日本にもたらされるのは80年代になってからのことだからである。いずれにせよ大量の寫本を比較研究することが可能になったことから、研究方法にも自ずか

³⁷董康の調査は中國の學界でも餘り注意されていないようで、『敦煌學大辭典』にも言及がない。この目録は「敦煌莫高窟藏書目録」という名稱であつたらしい。内藤乾吉『中國法制史考證』有斐閣、1963年、215頁に言及がある。

³⁸歸國後ペリオ本に據って『沙州諸子廿六種』昭和4年(1929)京都弘文堂書房刊、4冊、を排印出版し、また「巴黎國立圖書館藏敦煌遺書所見録」を雑誌『支那學』に連載した。5巻4號～8巻1號(昭和4年12月～10年10月)。

³⁹上山大峻「故大谷勝眞氏の敦煌寫本調査ノート」『人文』(京都大學人文科學研究所報)第6號、20～21頁、1972年。

⁴⁰竺沙雅章「那波利貞先生の敦煌文書研究」『草創期の敦煌學』167～175頁。

⁴¹『敦煌秘籍留眞』小林寫眞製版所、1938年2月刊。ペリオ敦煌寫本から63種のサンプルを選び影印したもの。また『敦煌秘籍留眞新編』はそのうちの33種について全巻を影印したもので、印刷も完了し、當時神田が奉職していた臺北帝國大學に置かれてあつたが、その刊行を目前にして終戦を迎えた。戦後1947年、新生臺灣大學から出版されたが、日本國內にはほとんど流布しない。

⁴²ジャイルズ目録が實際に出版されたのは2年後の1957年。

ら變化が現れるようになった。それまで個別の寫本について研究されてきた敦煌寫本は、一個の全體として俎上に上されるようになってくる。藤枝晃によって敦煌寫本全體に對する編年研究が主張され、また寫本學的な研究方法が提示されるようになった⁴³。その行き着くところ、今日では寫本の眞實問題もしばしば取り上げられるようになっている。

日本人學者の敦煌寫本探訪は戦後もそして現在も衰えを知らないが、近年の調査では紙質や墨跡など寫本の形式的側面にも注意をはらう研究者が増加しているのは紛れもない事實である。利用し得る敦煌寫本の量的な増大が、研究の方法にも大きな變化をもたらしたわけであるが、その先鞭をつけたのもまた日本學者の寫本調査であったことは注意してよい。この研究法の質的轉換の經過と意義とについては詳しく検討する必要があるが、これは別の機會に譲らざるをえない。小文では敦煌學の建設期に行われた日本學者のヨーロッパ訪書行につきその一端を紹介するとともに、日本の敦煌學への貢獻の一面を明らかにしようとしたに過ぎない。

(たかた・ときお 京都大學人文科學研究所)

⁴³ 藤枝の發言は様々な機會に様々なかたちで爲されているが、基本的な觀點はその “The Tunhuang Manuscripts, A General Description”, *ZINBVN*, no. 9(1966), 1-32; no.10(1969), 17-39 に提示されている。